－所蔵作品紹介－

遠藤　彰子　ENDO Akiko

岐路

みち

作品データはこちら

旭川美術館の開館20周年を記念し、当館のボランティア団体「常磐会（ときわかい）」から寄贈を受けた作品である。300号という大きなサイズで、当館が所蔵する絵画の中でも最大のものである。

この絵の作者遠藤彰子（1947生）は東京都出身。武蔵野美術短期大学を卒業後、おもに女流画家協会展や二紀会展で作品を発表し受賞を重ねてきた。1986年には、優れた若手具象作家の登竜門である安井賞展で安井賞を受賞。いま最も画壇で注目を集める具象画家の一人といえるだろう。

遠藤は、迷宮のような複雑な構造の都市空間を舞台に、人々の様々な人生模様を描き出した壮大なスケールの作品で知られる。自身の人生をも投影したその絵画世界は、行方の見えにくい現代社会に生きる人々の不安や希望を、独特のユーモアや詩情に包み込みながらあらわしたユニークなものだ。それは描かれるキャンパスの大きさともあいまって、観る者に強い印象を与える。

光と影が交錯する黄昏の街を描いたこの作品も、そうした遠藤の特長をよく示す一点といえよう。ゆがんだ陸橋や、電車や階段が入り組む奇妙な地下空間が、一見穏やかな街に潜むどこか不穏な気配を象徴しているようにも見える。だが、こうした中、揺らぐように曲がった陸橋をまっすぐに見据え、力強く踏み出そうとしている一人の人物が目をひく。二人の子を連れた自転車のその女性は、この先に何があろうとも未来を信じ、ひたすら前へ進もうとする遠藤自身の姿なのかもしれない。

旭川美術館だより「氷華」No.44（2003.３発行）「所蔵作品から」より